散策と思索の径

よみがえる「華洋雑居」の記憶・上海

井口淳子（いぐちじゅんこ）
大阪音楽大学教授

今年五月に開幕した上海万博。会場となっている上海は、成長著しい中国の現在を代表するとともに、重ねられた歴史を映し出す街でもある。アヘン戦争後、列強諸国はこの地で勢力を競い、日本もその一翼を担った。この都市と日本人とのかかわりに思いを馳せながら、当時の痕跡が今も残る上海の小径を歩く。

旧フランス租界に続々と出現する洋館レストラン。飲食文化も華洋雑居になりつつある

「草刈義人資料より『昭和17年ごろの上海交響楽団』」写真（東京藝術大学附属図書館所蔵）

上海音楽学院（旧ユダヤ人クラブ）

蘇州河をわたると

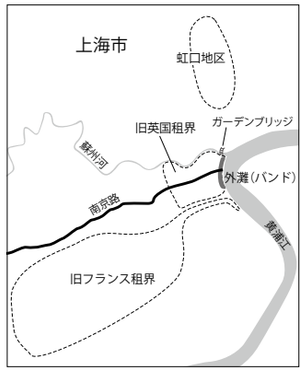
上海については、メディアで頻繁にとりあげられているうえに、映画やテレビドラマの舞台としてその様子を目にすることも多いのだが、一歩進んで日本人と上海が深くかかわった租界（アヘン戦争後、欧米列強が借りあげ治めた地域）について調べようとすると、膨大な書籍のなかから何を読めばよいのか途方にくれてしまう。

戦前には、長崎と上海のあいだに定期航路がもたれ、一昼夜で、この「華洋雑居」の都市に到着することができた。多い時期で一〇万人もの日本人居留民が暮らしたのは、英仏など西欧がつくりあげた租界中心ではなく、蘇州河（そしゅうが）をわたると風景が一変する、虹口（こうこう）（ホンキュー）地区であった。

つかの間の主

日本人街があった虹口地区からガーデンブリッジとよばれる長い橋をわたるとそこは旧英国租界である。上海のランドマークとされる華麗な建築群が黄浦江（こうほこう）にそって立ち並び（バンド・外灘（ワイタン））、メインストリートの南京路が西にのびている。船で上海を目指した人びとにとってこのバンドの風景はむかしも今も心躍らせるものであろう。

ながらく租界の隅に住み続けた日本人。しかし日中戦争はそんな租界の地図を塗り替えることになる。租界時代末期、日本軍が租界全域を制圧した一九四三年以後、日本人が租界のつかの間の主となり、欧州人といえば、亡命ロシア人とユダヤ系難民になっていった。



花開く劇場文化

そんな戦時下の上海ではあるが、意外なことに、日本内地では考えられないような「劇場文化」が高揚期を迎えていた。亡命ロシア人、そしてドイツ、オーストリアなどから逃れてきたユダヤ系音楽家がメンバーである最高レベルのオーケストラをはじめとしてバレエ、オペラやオペレッタ、中国人による先進的な演劇が公演を続けていたのである。

そんな租界を体感させてくれるのが、上海で暮らした小説家たちの作品群である。武田泰淳（たけだたいじゅん）が自身の一九四四から四五年の租界生活を描いた『上海の螢』（一九七六年、中央公論社）では、登場人物が敗戦直前に語る場面がでてくる。

「『もう東京には芸術はありませんよ。文化もありません。（中略）上海には、いや、上海にこそ芸術があるんですよ。白人も東洋人も、ここでは坩堝（るつぼ）の中のように煮えたって、溶け合って、新しい何かを創りだしつつあるんです。ライシャム・シアター、小さい劇場です。中国風に読めば、蘭心劇場ですがね。あそこで各民族の芸術の粋を集めた祭典を、われわれは創りださなくちゃならない』（中略）そして彼の自慢する本格的な交響楽団、本格的なバレエが上演され、演奏された。」

この「彼」とは実在のオーケストラの支配人、日本軍による文化工作の協力者として、戦時においても劇場公演を続けていた人物である。彼が日本にもち帰り、遺した資料は、小説中のことばが事実そのものであったことを実証している。

上海市民のものに

さて、南京路を西に進むと旧フランス租界にいたる。わたしにとってなじみ深い上海音楽学院は、フランス租界のユダヤ人クラブの建物を大切に使っており、そこから旅宿に帰る二〇分ほどの道の途中には国泰電影院（キャセイ・シアター）や蘭心大戯場（ライシャム・シアター）が往事の姿のまま営業を続けている。

蘭心大戯場では日本敗戦の直前まで、定期演奏会やさまざまな芸術公演がおこなわれていた。それを楽しんでいたのは中国人であり、租界文化はついに上海市民のものとなったのである。

そんな街路を戦前の租界地図を片手に歩いてみると、上海という街がたどったこの一〇〇年の複雑な素顔に、ほんの少し近づけるかもしれない。

ライシャム・シアター 2009年9月公演チラシ

黄浦江西岸の風景（バンド）